真・恋姫†無双　陳武編～化け物は貴様等“人間”だろう～

変態紳士沈没戦艦ＢＯＴＵ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
真・恋姫†無双　陳武編～化け物は貴様等“人間”だろう～

【Ｎコード】
Ｎ２１００Ｐ

【作者名】
変態紳士沈没戦艦ＢＯＴＵ

【あらすじ】
惰性で生きてる男が記憶を引き継いで転生した！
・・・のは良いんだけど、赤目に生まれてしまい、親に捨てられ、化け物と恐れられ、“人間”から逃げ着いたのは孫呉の領にあるとある森で・・・
劉備軍に厳しめ、一刀キライ、身内に甘く敵に厳しくその他は興味なし、そんな主人公が大丈夫な方は見てやってください＞（＿＿）＜

シリアス：３
ほのぼの：４
ギャグ：３
作者の思いつき：７（え

独り語り～物語の始まる口上～（前書き）

始めてしまった陳武連載・・・
あれ？
最初は夏候月編を投稿しようとしてたのに・・・
なぜこうなったｏｒｚ

独り語り～物語の始まる口上～

オレは一度死んだ

理由は至ってシンプル
自由業の方の喧嘩＝抗争に巻き込まれて殺された

え？何処がシンプルかって？
いや、歩いてたら胸に鉛玉を受け即死

な？シンプルだろ？

と、まぁそこら辺は別に良いんだ
オレは別に生に括ってた訳ではない
惰性で生きていたんだから

だからと言って死にたがりな訳でも自殺願望者でもない

惰性で生きていた訳だし
生きれるなら生きる
死ぬなら死ぬ

よーするにどうでも良かったんだ

閑話休題

今のオレは所謂、前世の記憶を持った人間だ

しかも前世の記憶はこれから起こる事を知っていると言うね

まぁ、簡単に言えば過去へ転生トリップ？

転生先は三国志の時代でしかもパラレルワールド？

さらに言うなら

この世界って、真・恋姫†無双の世界だったりする

ちなみに前世の記憶が定着した１０歳の時、絶叫した（ぇ

あぁ、そう言えば自己紹介を忘れてたね

オレの名前は、姓が陳（ちん）　名が武（ぶ）　字が子烈（しれつ）　真名が兎々（とと）

赤目に生まれたが故に親に捨てられ、人に蔑まれ、不当な暴力に遭い、化け物と呼ばれた

現在１２歳の、森に住む『赤目の化け物』です

独り語り～物語の始まる口上～（後書き）

感想をくださると喜びます
むしろ悦びま（ｒｙ

低クオリティーで何処までいけるのやら・・・（＿＿；）

過去の話～『赤目の化け物』の理由～

現在１２歳、『赤目の化け物』なんて呼ばれてるオレですが、
そもそもそんな風に呼ばれるようになったの発端はオレの体質にある

オレの体質、それは・・・

動物に警戒されないこと

つまり、警戒されないが故に懐かれる
オレは森の南部、丁度巴と隣接する部分に居るのだが
食料・・・果実や木の実、キノコ等、肉以外のもの・・・はたいて
い動物たちが集めてきてくれる

冬に成り寒ければ皆、寄り添って温めてくれる

肉食も草食も関係なく、狼虎熊狐狸鹿馬パンダ・・・

オレの周りに集まり、皆、喧嘩もせずにのんびりと過ごしている

肉食のやつらは餌を得るためにわざわざ北部に行ってたりもする

そうなってくるとオレとしてはこいつらに愛着が湧くわけで、
狩人から守ったりしているうちに誰も寄り付かなくなり、自然とそ
う呼ばれるようになった

ちなみに、６歳の時からこいつらと過ごしてるうちに着いた力やら
反射神経やらが役に立った事は言うまでもないと思う

ただ、『赤目の化け物』を討伐するんだとたまに意気込んでくる馬鹿どもが増えてきたことが悩みの種である

閑話休題

そして１０歳の時、ある意味運命の出会いが有った・・・

過去の話～『赤目の化け物』の理由～（後書き）

中途半端ですが一旦〆（ぇ
次の話でこの物語のキーキャラの一人と出会います

・・・見てくれているお人はいるのだろうか？

過去の話２～一つ目の運命～（前書き）

なんと、感想をくれた方が居ました！！
ありがとうございますｏｒｚ（土下座）

感想の返信はあとがきにてします（＞ｍ＜）、

さあ！
みｗなｗぎｗっｗてｗきｗたｗ

過去の話2～一つ目の運命～

１０歳の時、何の前触れもなく、不意に、彼女はオレの目の前に現れた

「・・・あら？貴方は・・・？」

「っ！？」

木々の隙間から漏れる木漏れ日に、心地よい風、葉擦りの音

そんな、誰から見ても平和な日

オレの周りに身体を伏せているのは、動物たちの中でも比較的強い５匹

大狼の灰歌（はいか）

白虎の琴（こと）

熊猫の來々（らいらい）

大鷲の茶翔（ちゃと）

馬の黒楼（こくろう）

敵意や悪意、害意に敏感なはずの５匹に加え、オレもいたのに

誰も、彼女の接近に気付かなかった

「・・・誰だ」

「あら？この辺りで私の事知らない子が居たなんて・・・私もまだ

まだってとこかしら？」

首を傾げる様は可愛らしく見えるが、その身のこなしに一部の隙もなく

また、彼女の持つ気配は大きく、周りの子達が警戒することから、とても、強い人と言う事は分かった

「うん、良いわ、私の名は孫文台・・・呉の王よ」

それが、彼女・・・いや、オレの大切な人との、ファーストコンタクトだった

～二ヶ月後～

「～～～なのよ、まったく、私の事どう思ってるんだか・・・」

ファーストコンタクトで「この森から出ていけ！」と襲いかかったオレだが、一瞬にして返り討ちに遭った

地面に倒れ伏したオレを見下ろしながら彼女が言った言葉は

「ふぅん・・・おもしろいわね、貴方」

「気に入ったわ！明日からも会いに来るから、よろしくね」

だった

それからと言うものの、彼女、孫文台はオレが『赤目の化け物』と呼ばれている事を知りながらほぼ毎日、オレに会いに来た・・・日々の愚痴を言うために

オレはと言うと、自分が勝てない、だけど悪意や害意は無いと分か

ったのでそのまま無視していた

そんなある日

「ちょっと～、聴いてるの～？」

「・・・」

ココまでは何時もの事だった

「・・・ねぇ」

ココから、彼女の雰囲気が変わった

「貴方、名前は有るの？」

「・・・」

その言葉に見え隠れする感情は

「いつまでも貴方では拙いでしょう？・・・それに・・・」

「貴方の事、名前で呼んであげたいし・・・」

少しの気まずさと、多大な気遣い（やさしさ）

「・・・ない」

「っ！？えっ！？」

初めて、彼女の言葉に反応した瞬間だった

「オレの・・・名前」

「・・・そう・・・悪い事を聞いたわね」

この時から、オレは彼女を信頼し始めていたのだろう

「分かったわ！じゃあ、私が貴方の名前を付けるわ！！！」

「そして、貴方のお母さんにも成る！！！」

衝撃だった

他人のオレに名前を付けてくれる

何より、こんな異端の母親に成るという

「・・・なん、で」

「なんで？そんなの、貴方が好きになったからよ！」

「なにより、貴方に“愛”を知って欲しいから！」

オレの身の上は話した事は無い

疑問にも思っていただろうが彼女は聴いてきたこともない

その上で、彼女なりにオレの事が分かったのだろう

まともにしゃべったのも今日が初めてなのに・・・

「貴方の名前！性は陳（ちん）　名は武（ぶ）　字は子烈（しれつ）で、真名は兎々（とと）！」

「意味は、『私と武（武）を並べる（陳）優れた（烈）義息子（子）』真名は『兎（兎）の様（々）な私の可愛らしい義息子』よ」

「・・・」

「ね、兎々？」

フイッとそっぽを向くオレの顔は恐らく、真っ赤で、でも、微笑んでいると思う

「私の真名は魅蓮（みれん）よ」

「これからよろしくね？」

ゆっくりと、頭をなでる手を心地よいと思いつつ振り払ったのは照れ隠しだ

過去の話2～一つ目の運命～（後書き）

名前の意味はこじつけです
漢字辞典みて、単語の意味に乗ってたのが都合よくそんな意味だったので使いました

感想返信

＞初めまして、とんぷーと申します。
読ませて頂きましたが、なかなか面白そうな作品なので
続きに期待大です。
ゆっくりでも良いので頑張ってください。
次回更新をお待ちしています！！

A．はじめまして、とんぷーさん！
読んで頂けて・・・ありがたいです！！！
こんな若輩者に期待までして頂けるとは・・・
期待に応えられるようにがんばります！！！
更新は、超不定期です（｜｜；）
こんなんですが見守っていただけたら幸いです

＞んー、少々短いと思います、幕間や小ネタならいい感じなんですが。
文の量を増やしてみては如何でしょう？
ある程度の質を保ち、ある程度量があると嬉しいものです。
その二つの両立が難しいのですが・・・

頑張ってください、見てる人はいますから

A．はい！と、言う事なので今回は自分なりに量を増やしてみましたが・・・

どうでしょうか？

個人的には２話考えて、合わせたのでよければ今後もこれくらいの量はいけると思いますが・・・（｜｜；）

感想やユニーク、ＰＶがＢＯＴＵの執筆活動の源なので、

そう言っていただけるとやる気、元気、イノｋ（ｒｙが湧きます！

過去の話3～宿将との試合～（前書き）

感想が更に４つも！！！
嬉しい！嬉しすぎます！！！
これは・・・更新するしかないじゃないか！（え

やはり、感想の返信は後書きにて

過去の話3～宿将との試合～

彼女、魅蓮さんが義母(かあ)さんになって一年
訓練と言う名のシゴキに耐え、（義母さん曰く）そこいらの武将とも謙遜ないくらいに戦えるようになったらしい

数日前に武器として全身が鋼でできた円柱の棒“夢幻影牙(むげんえいが)”を貰った
もともと使ってたのは賊から奪ったなまくらで、亡くなった家族(なかま)の牙や爪を加工して作った短刀や、同じく木を加工して作った棒や弓だったので正式な武器を貰えてとても嬉しかったのを覚えている・・・あと、らしくもなくはしゃいでしまった黒歴史も・・・

で、今日、部下の人を連れてくるから力試しに戦ってみなさい、と言われたんだけど・・・

「ほれ、どうした？さっさと構えんか」

目の前にいらっしゃるのは原作の時より少し若い黄蓋さん

「ほらー、兎々！勝ちなさいよー」

・・・宿将相手に勝てるわけないでしょう・・・？

「・・・はぁ」

“夢幻影牙”を右肩に担ぐように構える
身体は左半身を黄蓋さんに向けて半身
足は肩幅に開いてちょっと左よりの重心

顔は薄く笑みを浮かべ視線は黄蓋さんを含む前方すべて
仕上げに左手を前にして手のひらを天に
そして・・・

「さぁ・・・踊ろうか？お嬢さん？」

クイクイと人差し指を動かして挑発

「っ、ほう、ならば望みどうりこちらから仕掛けてやるわっ！」

ダンっ！
と、一気に踏み込んで来る黄蓋さん
目の前に来ると同時に低い体勢から剣を振り上げる

「む・・・」

すり足で後退し、思いっきり右手の“夢幻影牙”を振りぬく

キィンッ！

しかし黄蓋さんは、すっと、事もなさげに片手で防ぐ

・・・思いっきり振りぬいたのに・・・

少し落ち込みながらも、防がれた部分を起点にぐるっと一回転、背中を取る

「・・・貰う！」

そのままの状態では扱えないので、くるっと腕を使って“夢幻影牙”を一回転させてその勢いのまま振り上げる

「ちぃっ！」

とっさに前に跳び込み前転をされてかすりはしたもののダメージは与えられず仕舞い

「牙突・・・っ！」

避けられたと分かった瞬間に某幕末の正義を掲げる人の技を使う

「くっ」

それも後ろを向いたままなのに、視線だけで確実に技を見切り、剣で逸らされる

「・・・っ！」

ふっ、と一息

伸ばし切っていた腕を曲げて“夢幻影牙”を引き戻しつつ肘を前に、踏み込む

「かっ！？」

調度背骨に当たり、また、黄蓋さんも完全に体制を整えられてなかった為、前のめりに倒れ込む

そして、曲げていた腕を振りおろし・・・

「そこまでっ！」

首元に着き付けた時、義母さんからの試合終了の声

「・・・ふぅ」

すっと“夢幻影牙”をどけて手を差し出す

「・・・やれやれ、このわしが負けてしまうとはなぁ」

「この子にそれだけ才能が有って、努力もしたって事よ」

手を取って立ち上る黄蓋さんと褒める義母さん

・・・恥ずかしくなってあらぬ方に顔を向けてしまう

「偶然、だよ」

「またまた、謙遜なんかせんで良いわ！おぬしはわしに勝った、それだけじゃろう！」

「そうね、いくら本来の武器の弓を使ってないとはいえ並以上に強い祭に勝ったんだもの、誇っても罰はあたらないわよ」

・・・何度も褒められた事は有るけどやっぱり成れない・・・

「わしの真名は祭じゃ、受け取れ、小僧」

「・・・良い、の？」

躊躇いもなく真名を預けてくれる黄蓋さんに思わず聴き返す

「あたりまえじゃ！なんせわしに勝ったんじゃからのう・・・そんな奴なかなか居らんぞ？」

「・・・あり、がとう・・・オレの、真名、兎々」

後々めんどくさい事に成らずに済みそうなのでココは素直に受け取る

「所で兎々よ、呉に仕える気は無いのか？」

「あ、私もそろそろ言おうと思ってたのよ。どう？兎々？呉に、私に仕える気は無い？」

急・・・でもない誘い

むしろ今まで誘われなかったのが不思議だ・・・

でも・・・

「今は、ない・・・まだ、家族、たちと・・・居たいから」

そう、まだこの森を離れたくないのだ

これはオレの我儘

「ごめん、なさい」

もう2，3年

そうすればここら辺に巣食う賊も大分少なくなるだろうし、安心して家族たちと別れる事が出来る

「謝らないで良いわよ、兎々・・・貴方にも考えが有るのだろうし、“まだ”なのよね？ならいつかは来てくれるのでしょう？」

・・・やっぱり、義母さんは鋭いなぁ・・・
まだ、って言った意味もだいたい理解してくれてるみたいだし、何より・・・

「さてっと！祭！帰って賊の討伐とここら辺の治安について考えなきゃね」

「っ！？堅殿から仕事の話が・・・」

「なに？おかしいのかしら？」

「・・・ひと雨、来るかのう・・・？」

「ちょっと！？どう言う意味よ！？こら！？祭ってばー！？」

オレの事、分かってくれてる事が、嬉しい

じゃれあいながら森を出ていく義母さん達を見て、クスッ、とほほ笑んだ

過去の話3～宿将との試合～（後書き）

さて、これで過去話が終わりました！
次からは今、１２歳からの話に成ります
シリアスパートに成りますので、作者が本領発揮します（ぇ

閑話休題

今回はどうでしょう？
タグどうり戦闘描写に力を入れてみたのですが・・・
意見、下さると嬉しいです

拍手返信

＞マイペース頑張ってください。
他の作品と違う感じで面白いです＾＾
あと余計なお世話かもしれませんが、
登録してない人でも感想をかけるようにしたらどうでしょう？

A．マイペースに不定期で頑張らせていただきます！（ぇ
おもしろいと言って貰って感動の極みです！！！
これからもそう言っていただけるように頑張っていきますのでよろしくお願いします！！
えーっと・・・どうやったら登録してない人でも感想をかけるように出来るのでしょうか？
作者、機能が良く分かって無いんです（｜｜｜；）
良ければおしえてください＞＜；

＞楽しく読ませていただきました。ケルトです。
いままでにない展開、面白かったです。
続き楽しみです。

A．これはご丁寧に。作者の変態紳士沈没戦艦ＢＯＴＵ、略してＢＯＴＵです。
楽しく読んで頂けて幸いです！
頑張りますのでこれからもよろしくお願いします！！！

＞どうもはじめまして、若輩侍と申します。
情景描写や心情描写が分かりやすくてとても読みやすかったです。
主人公の設定も斬新で、とても良いですね。
会話の所について、
台詞を一言ずつ分けずに、纏めて書いた方が分かりやすいと思います。今後多くのキャラが出てきたときに、今の会話の書き方では大変なことになると思います。
内容に関してはかなり面白そうなので、どうか最後まで書ききってもらいたいです。
アンチ蜀＆一刀のようですので、兎々と彼らとの絡みも楽しみです。
次回も楽しみにしています。

A．これはご丁寧に。作者の（略）ＢＯＴＵです。
情景描写や心理描写は戦闘描写の影響です（ぇ
分かりやすいと言って頂けるとありがたいです＞＜
主人公設定は某三国志カードの『黄色い顔に赤い目と言う怪異な風貌』から取りました
・・・詳しい設定とか入れた方が良いのでしょうか？
会話はわざとやって居たのですが・・・今回は普通にしてみましたどうでしょう？

内容はご期待に添えるように頑張ります！！
投稿した作品は必ず最後まで書きあげますので！付き合って頂けたら嬉しいです
アンチ蜀＆一刀・・・なのでしょうか？（ぇ
ただ、主人公君、一刀はキライです
てか、劉備もキライ
でもあわわとかはわわとかメンマ仮面とかは好き
閑話休題
今回はどうでしたでしょう？
楽しめましたか？
楽しめたのなら幸いです

ではでは、長くなりましたが、（略）ＢＯＴＵでした

『赤目の化け物』の話～化け物たる所以～（前書き）

返信と言う機能をこの前知った。
正直、恥ずかしくなった。
返信は気づき次第、返信機能でします。

今回の話はシリアスもどき（？）
作者的にはシリアス。
でも他の人からしたら普通の話かもしれない。
故にシリアスもどき。

では、行ってみましょう。

『赤目の化け物』の話～化け物たる所以～

黄巾党、黄巾賊

そいつらがこの森にやって来た

こちらに被害が無いならほっとこう、そう思ったのがそもそもの間違い

目の前に“ある”のは、この森の長老の大亀、玄武(げんぶ)だったもの

甲羅は割られ、首と四肢を切られ、ぐちゃぐちゃにされた、オレにとっての育ての親

「ぅあ・・・」

身体が震える

悲しみ、怒り、そんな感情が混ざり合って、思考が出来ない

ただ一つ、言えるのは、亀は食べない

なら、玄武を殺したのは、明らかな娯楽

「ガアァアアアァァァアアァァァァ」

『赤目の化け物』の逆鱗に触れた、哀れな人達(ばけもの)よ

死(しゅうえん)はすぐそこだ

逃げれると思うなよ

「灰歌（はいか）、琴（こと）、來々（らいらい）、茶翔（ちゃと）、黒楼（こくろう）・・・殺し（狩り）の時間だっ！」

ｓｉｄｅ黄巾

ガオォォン

一瞬、見張りをしてたやつが気を抜いた瞬間に唐突に表れた白虎に喰い殺された

「な、なん・・・ぎゃっ」

動揺するもう一人のやつは反対から来た熊の張り手をもろにくらって、あらぬ方に首が曲がる

「ひっ、ひぃ」

「な、何だこの動物達は！？」

「ぎゃぁぁぁ」

阿鼻叫喚

虎が熊が狼が熊猫が鳥が馬が鹿が蛇が犬が猫が鼠が
この森に住むすべての動物が、人を殺さんと襲いかかる

「ひっ、ひっ・・・ぐえ」

ほうほうの体で逃げだしたやつは、

「貴様等全員、この『赤目の化け物』の逆鱗に触れたんだ。
・・・逃げれるとオモウナヨ」

噂の『赤目の化け物』に殺される

「く、くそぉぉぉぉ！」

剣を、槍を、持って特攻する奴も

「や、やめ・・・ぎゃっ」

腰を抜かして命乞いする奴も

「・・・」

オレのように茫然としてる奴も

一様に皆が感じているのは己の“死”だけだった

何処で何を間違えてこんな事になったのか

そんな事を考えながらオレは・・・

sideout

殺し尽くした
この森に居た黄巾どもを
でも、この心に残ったのは、

虚しさだけ

『赤目の化け物』の話～化け物たる所以～（後書き）

意味深に終わらせました。
次回へのフラグです。
・・・回収できるのかな？（ぇ

てか、難産！
考えが全然文字に成らないのなんのって・・・
多分今回はクオリティ低いはず（ぇ
期待してた方、ごめんなさい

あ～・・・やってもうたわ～・・・ｏｒｚ

閑話　動物達の話～おもいおもい～（前書き）

まだ続くシリアスもどき

それはそうと、夏候月編も書きだそうかなとか何とか思いつつ、
勘違い孫静編も書くのおもしろそうだし、
病んバル悔いなさんから頂いた朱霊と簡雍も書きたいけど、
張任カッコイイよ張任

つまり気が多いいんだ、（略）ＢＯＴＵって奴は（ぇ

閑話　動物達の話～おもいおもい～

ｓｉｄｅ他

玄武(げんぶ)が黄巾のやつらに殺されて３日目
兎々は“生きて”いなかった

ただただ空間を見つめ、そこにあるだけだった

動物達、特に灰歌(はいか)、琴(こと)、來々（らいらい）、茶翔(ちゃと)、黒楼(こくろう)は、
元気づけようとするも、どうしたらいいのか分からない状態だった

兎々は言葉は通じなくとも自分たちの意思を汲み取ってくれていた
でも今は兎々にそんな余裕はない

食料を持っていけば食べてくれる
近くに寄れば撫でてくれる
でも、すべての物事に意識は向かない
ただ、そこに“ある”だけ

そして動物達に理由は分からないが本能で理解した
兎々は今、壊れかけているんだ、と

そして、自分達にはどうする事も出来ないのだ、とも

もし、兎々を今の状態から救えるとしたら魅蓮(みれん)だけだろう

ならば、今、自分達に出来るのは？

灰歌と琴は仲間を連れて獲物を探しに駈け出した
兎々の命を繋げる為

來々は仲間と手分けして付近を見回る
兎々が賊に襲われないように

茶翔は仲間を引き連れて森から飛び立った
魅蓮を呼びに行くために

黒楼は兎々の真横に寄りそった
夜、兎々が凍えないように

閑話　動物達の話～おもいおもい～（後書き）

量が少ないのは勘弁してほしい
次回はこれの二倍以上書くから（ぇ

サブタイの～おもいおもい～は
５匹が“思い思い”に兎々の為に行動するのと
動物達の兎々を思う、“大切な（重い）想い”
をかけて見たんだ

うん、何かもう、すいません

母親の話～不安～（前書き）

あけました、おめでとうございます
今年最初！

更新遅れてごめんなさいｏｒｚ
言い訳は後書きにて・・・

母親の話～不安～

ｓｉｄｅ～魅蓮～

その日はやたらと動物達が騒がしかった

最近は賊の討伐やら何やらで処理しなくてはならない書簡が増え、
更に祭がサボるので、あの子に会う時間が減ってしまっている
今日こそはあの森へ行こうと思っていた矢先にコレだ
何か起こるかもしれない

そんな思いであの森に行く旨を祭に伝えようと、ついでに恨み事の
一つでも言おうと“いつも”の酒屋に行く

「さ～い～・・・またここでサボって・・・将来、雪蓮がまねした
らどうするつもりよ？」

「魅蓮殿！？何故ここｎ・・・って、南海覇王をこちらに向けんで
くれんか・・・？」

祭の言葉通り、南海覇王を祭の目の前につき付ける

「あら？理由が分からない訳無いでしょ？」

「・・・何の事かのぉ？」

「・・・書簡・・・」

とぼける祭にボソリとつぶやく

「・・・・・」

「報告書も」

だらだらと汗を流す祭

・・・ちょっと楽しくなってきたかも・・・

「すぐに出せるわよね？だってもう何週間も前に私に出すはずだったものね？」

「・・・・・・・・・」

「今日中に出しなさい？さもなくば禁酒させｒ」

「おっと、やらねばならん事が出来た、魅蓮殿、これで失礼する」

ガタッと席を立ち城に戻ろうとする祭

「あ、祭、私ちょっと森に行くからよろしく」

「了解じゃ、気を付けなされよ」

「ん、じゃ、がんばってね～」

祭と別れ、とりあえず森の麓（ふもと）の村に向かう為に厩（うまや）へ向かって歩きだした

・・・・・・・・・・・・・・・

・・・・・・・・
・・・・・・

馬を走らせること半刻、そろそろ村が見えるかなと言う時にその子が飛んで来た

「茶翔(ちゃと)？」

ピ、ピピピッ、ピッ

私の目の前に来ると、鳴きながら翼をバタバタとはためかせて何かを伝えようとする

まるで焦った人間の様に・・・

「っ！？兎々に何かあったのね！？」

この子が焦る理由は、私に焦って伝えようとする事は一つ

兎々の事以外ではあり得ない

ピピッ、ピピッ

またも、鳴きながら、しかしバタバタバタバタと先ほどより翼を激しく動かし、その場でくるりと回った後、まるで付いて来いとでも言うように低めに飛んで行く

「無事で・・・無事で居てよ、兎々・・・」

馬を翔ばしながら、無意識につぶやいた言葉は私の不安の大きさを表して居たのかも知れない

母親の話～不安～（後書き）

中途半端に止めてごめんなさい
ここが、キリが良かったんだ・・・

更新が遅れた理由ですが、
繁忙期に入りバイト先が人員不足に成り、８時間勤務の連勤だったり、
休みの日も忘年会だったりでほとんど動きっぱなしだったんです
簡単に言えば、パソコンが開けないほど疲れてたんです・・・

・・・ホントに言い訳だし（ー＿ー；）
不甲斐無い作者ですみません><。

ちょこちょこと頑張って行くので、見捨てないで居てくださるって方は、
ゆっくりと更新を待ってて欲しいです

母親の話～母は強し～（前書き）

活動報告にも書いたけど、インフルー！（え

奇跡的にも家族にうつしてないのが救い

ってかインフル成ったのはじめてかも（え

母親の話～母は強し～

ｓｉｄｅ～他～

赤目の化け物が出ると言われているこの森、麓の町に行く近道だがココの所、誰も好んで通ろうとはしない
話によると、狩人を追い返し、武芸者を返り討ちにし、賊を殺し尽くしたらしい
そんな化け物が居る森なんぞ、普段なら通ろうとは思はないが、今回は急ぎの仕事が有った
呉の宿将、黄蓋様へ荷物（おさけ）を届けると言う仕事
期限は今日を含め後三日
行商として色々と贔屓にしてくださっているから、遅れる訳にはいかない
荷物もあるし、面会を待つ事を考えると、この森を抜ければ2日半、迂回すれば5日はかかる
仕様が無い、森を抜けよう、と思ったのは、幸運だったのかもしれない
その風景を見る事が出来たのだから

その風景は、例えるなら一つの芸術作品のようだった
その双眸の赤目は何処に向くわけでもなく“そこ”を見続け、
その躰は黒の美しい毛並みの馬にもたれかかる様にしてあり、
それを照らす日の光は木々の隙間から零れ落ちる様に葉に反射しながらキラキラと

行商を始めて三十年、これほどまでに“美しい”と何かに感じる事は無かった

どれほど見惚れていただろうかは分からないが、馬の翔ける足音に気が付き、意識が戻った

そちらの方を向けば驚いた事に孫堅様がこちらへ、大鷲を先導に馬を翔ばして来ていた

・・・これ以上はいち行商が入り込んでいい領域ではない

そう思ったオレは、最後にもう一度その風景を目に焼き付け村に向かって森を抜けた

ｓｉｄｅ～魅蓮～

儚く、今にも壊れてしまいそう

今の兎々の姿を見て先ず思った事

そして、その何処も見ていない目には確かに、悲しみの色が見えた

「兎々っ！」

思いっきり抱きしめる

多分この子は悲しみと言う感情を知らないのだろう

名前が無かったこの子

この子に常に向けられていた感情は多分、“赤目と言う事”への恐れ、だけだろう

幼い、そう言っても差し支えが無い容姿、年齢
拙い、区切りながらの言葉

考えられるのは棄てられた、ただそれだけ

出会った当初から何でも一人で出来ていた兎々
たまに出す、老成した雰囲気
でも、この子はまだ子供なんだ
子供、なのだ

「かあ、さん？・・・おれ」

「何も言わなくていい！何も言わなくていいから・・・」

「で、も・・・」

ポンポンとあやす様に背中を叩く

「何か悲しい事が有った、なら泣きなさい、泣いて泣いて、忘れる事の無い記憶にしなさい・・・そうしないと、貴方が壊れてしまうわ・・・」

「うぅ・・・ぁ、ぅぁあ゛あ゛あ゛あ゛あ゛あ゛」

麓まで聞こえたこの泣き声は、後に麓の人に『鬼の鳴き声』と謂わ

れ、この森には『赤目の化け物』とは別に『啼く鬼』も居ると噂されるようになった

母親の話～母は強し～（後書き）

何日かに分けて書いたのは良いけど当初の予定と大幅に変わってしまった
どうしてこうなった・・・ｏｒｚ

行商なんてこの話では出る予定なかったのに

とりあえず書き直しもめんどいし、これはこれでありかな～なんて思ってるので投稿します
続けるのには問題ないし（ぇ

ちなみに行商さん、名前もあるし以外とチョイ役で出る予定のキャラだったんです
・・・出る予定が早まったけど・・・ｏｒｚ

さて、次の話も描きだそうか（ぇ

母親の話～二つ目の運命～（前書き）

前回の無理矢理感に見捨てられてないか心配してるものです

前回から時間が飛びます

キングクリムゾン！！

解説言い訳はあとがきで＞＜；

母親の話～二つ目の運命～

義母さんに縋り付いて泣いてから二年がたった

変わった事と言えば祭さんの事を祭姉(さいねえ)と“呼ばされ”てる事と、すらすら喋れる様になった事、字の読み書きが出来るようになった事かな？

あと、孫策ちゃんにも会った・・・と言うか、最初は斬りかかられたまぁ、色々と誤解だった訳だけど・・・

袁術と張勲・・・美羽と七乃にも会った

作中で語られてたよりも良い子だったので驚いた

そんなこんなあって、旅に出たいと思うようになった

オレは世間を知らなさすぎる、とも

だから、義母さんが来たら言おうって思ってたのに・・・

「兎々・・・堅殿が・・・亡くなられた」

世界は、何でこうも上手く回らないんだ・・・

母親の話～二つ目の運命～（後書き）

短っ！？
あれ？また勝手に動いた？
展開が早い・・・↑

二つ目の運命、堅ママが死ぬこと
うん、これは当初の予定どうり

時間を飛ばしたのは原作に入らせたかったから、二話くらいかけようと思ってたんだ
そしたら一話に纏まった（ぇ

うん、まぁ仕方ない（おぃ
次だ次！更に４年後！
１８に成って原作ちょいと前くらいの話！

墓参りの話～再会は突然に～（前書き）

休日を費やしてこの話を召喚！！！
前半シリアスもどき後半ギャグ？

ギャグとかどうやって書けば良いか分からんとです

短いし、内容薄いし・・・もっと頑張りますｏｒｚ

因みにアンケート結果は１
若輩さんのみの投票でしたのでｗｗ

この小説の人気の無さがうかがえるｗｗ

若輩さんありがとうございました！！！＞＜

墓参りの話～再会は突然に～

「・・・懐かしいな・・・」

とある森の奥深い所、そこにある大木の幹に触れている男が居た

漆黒の帽子（フード）のついた外套

帽子（フード）を深く被り、見えている部分は口元のみ

その男は誰に言うまでもなく、喋る

「もう あれから４年たつのか・・・」

サワサワと風に揺れる外套

「・・・墓参り、しなくちゃな・・・」

帽子（フード）が一瞬ずれて、そこに見えたのは・・・

口元だけ開いた、鬼の面、だった

・・・・・・・・・・・・・・・

・・・・・・・・・・・

・・・・・・・・・

「・・・って事もあったなぁ」

質素な、そこに建ててるだけの様な小さな岩
そこに彫ってある文字は

孫堅文台　此処に眠る

その岩の前に座り込み、旅の話を摘み替わりに、持って来た酒を飲む

「・・・義母さん、あいつらもソッチに逝ったよ・・・寿命を全うしてなぁ」

思い浮かべるのは、４年前、旅に着いて来てくれた５匹の家族

「皆、どっからか嫁を連れてきてよ、來々に至っては子供(ガキ)が生まれてたんだぜ？吃驚だよ」

薄く笑みを浮かべながらその時の事を思い出す

「で、あいつらの嫁も連れて放浪して、子供(ガキ)が産まれたら近くの森とか村とかで何カ月か過ごして、狩りが出来るようになったらまた放浪」

短いようで長かった４年

「あいつらが死んで、あいつらの家族もその近くの森に残して・・・

やっと、やっと、義母さんとの約束を叶えるよ」

クッと酒を飲んでしまう

「はぁ～・・・無粋なお客さんだな？」

「貴方・・・誰よ？」

首だけで振り向けば、義母さんに似てきた義姉(あね)と、４年前と全く変わらない“姉”の姿

「ククッ、運が良過ぎる・・・明日にでも死んじまうんじゃねえか？オレ？」

「質問に答えなさい」

南海覇王に手をかけて凄む義姉

まぁ、自分で言うのもなんだけど、結構怪しげな格好してるからな、オレ

義姉からしたら、母親の墓場に居る不審者だからな

「酷いもんだねぇ・・・久々の再開だってのによ」

パサッと帽子(フード)を外し、鬼面を取る

「面を外して他人と会うのは久しぶりだなぁ・・・っと、それよりも・・・

久しぶり！策義姉(さくねえ)、祭姉(さいねえ)」

「「兎々・・・？」」

呆けた顔をしている二人

そんなに意外か？

確かに「旅に出る」とだけ言って出て行ったのはオレなんだけどさぁ・・・

「兎々っ！おぬし今まで一体何処にっ・・・策殿？」

スッと手で祭姉を制して歩み寄ってくる策義姉

・・・どことなく怖いのは気のせいだろうか？

「とりあえず、先ずはおかえり、兎々」

「あ、あぁ、ただいま」

ポンっと肩に手を置かれる

「色々言いたいけどまあ良いわ・・・それより、」

ガシィっと物凄い力で肩を掴まれる

「さ、策義姉？肩がギシギシ言って・・・ちょっ、ミシミシ言ってる！本来身体が出しちゃいけない音　がしてる！？」

ニッコリ笑って更に力を込める策義姉

「一発、殴らせなさい？」

「は？ちょっ・・・もるぷらぁっ！？」

意識が無くなる前に見たのはどこかすっきりしたような策義姉の笑顔と祭姉の引き攣った顔だった

運が良いとロクな事がない・・・ガクッ

士官の話～新しい家族～（前書き）

遅くなってすみません><；
いや、想像以上に長くなってしまった・・・
え？いつもが短い？
こ、こまけぇこと（ｒｙ

士官の話～新しい家族～

目が覚めたら手が後ろで縛られていた
牢屋にいた
兵士にどこぞへ連れられた
今はそのどこぞで突っ立ってる

この状況にまったく意味が分からず周りを見れば、

「あ？・・・あー・・・」

どこぞの城らしい
いや、呉の城らしい

玉座に策義姉（さくねえ）
横に祭姉（さいねえ）と知的な眼鏡美人・・・周喩
周りに有象無象
原作に近づいたって感じだ

閑話休題

策義姉が連れて来たは良いが不審者と見られたか

仮面は取られてない・・・いや、策義姉か祭姉が気を使ってくれたか

「・・・はぁ、で？これはどういう状況な訳？」

その不遜な物言いにか、その態度にか、もしくは両方にか
周りの有象無象がざわつく

「・・・もう少し考えて発言しなさいよ」

「こんな育ちだ、周りの有象無象なんぞ気にしてられるかよ」

呆れた様な策義姉にケッと吐き捨てる様に言う

「で？策義姉・・・いや、この場合は眼鏡の人かな？何がしたい？何が聞きたい？」

・・・いきなり話を振ったのにも顔色一つ変えないか・・・厄介そうだ

「なに、孫策が怪しい人物を連れて来たんだ、警戒して当然だろう？」

「正確には無理やり連れて来られた、なんだがな・・・御付の軍師としてはこれくらいは当然、か・・・それで？」

「・・・お前の素性を説いたい・・・孫策も黄蓋殿も知り合いだと言う。

だが私はお前のような者を知らない、見たことも聞いたこともない。

何よりその仮面は外してはならないと言う。」

「手前（てめえ）が知らないだけじゃねぇのか？」

「これでも2人との付き合いはここに居る誰よりも長いと自負しているがな。

・・・それで？答えは？」

「・・・かっ、参ったね。口で勝てる気がしねぇ・・・策義姉、真名を許してる奴は？」

頭良い奴との会話は楽しいが、腹の探り合いは必要以上に疲れる・・・

「うぇ！？・・・あ、あー・・・黄蓋、周喩、陸遜、周泰、程普・・・かな？」

・・・策義姉に周喩と同じように冷静な対応は無理っと・・・

「その５人以外に話すつもりはない」

「まぁ良いだろう。今要った５人以外はすまないが席をはずしてくれ」

妥協するべきかそうじゃないかの判断も即座に出来る・・・敵には回したくないね

まぁ、今まさに敵に回してる訳だが・・・

「ふむ・・・なるほど、な」

祭の後ろに隠れるように残っている少女を見て思わず呟く

とりあえずオレの呟きが聞こえたのかニヤニヤしている策義姉は後で殴る

「素性ね・・・簡単に言っちまえば、孫文台の義理の息子で、『赤目の化け物』ってとこか」

「魅蓮様の・・・？いや、『赤目の化け物』だと！？」

「ま、そういうことだ・・・だから、怖がる必要はないぜ？」

そう言って祭の後ろに隠れている娘・・・蒼目で縦目の娘・・・に近づく

「オレの名は陳武　子烈で、真名は兎々ってんだ、お前は？」

「ぅ・・・程普　徳謀、真名は、涙（なみだ）・・・です」

掻き消えそうな声で呟く程普の頭をぽんぽんと撫でる

「今日から程普はオレの妹だ！お前に文句を言う奴が居たらつれて来い、オレがそいつを殴り飛ばしてやる！」

にっと笑ったオレに程普は涙を流しながら抱きついてきた

オレに、“人間”の家族が増えた瞬間だった

士官の話～新しい家族～（後書き）

はい、ってなわけで携帯電話さん原案の程普ちゃんが出ました
元は蒼目色白金パだったけど結局は蒼目で縦目という設定に
詳しい設定とか書いたほうがいいのかな？

何か不備があれば感想、レビュー、メッセージいずれかで報告ください

士官の話～孫呉第四位継承者～（前書き）

投稿遅くなりました＞＜；
すみませんｏｒｚ
構想とか考えてたら投稿し忘れて・・・
マジですいませんでした＞＜。

ｐ．ｓ．呉の継承者としての話のはずが・・・

士官の話～孫呉第四位継承者～

「孫堅様の義理の息子、孫策の義理の弟として、陳武を我が孫呉の第四位継承者として迎え入れる！」

周瑜のその宣言で再度、文武官が集まった広間がざわつく
その大半が、いや、ほぼ全てが反対する声だというのに腕を組んでピクリとも動かない兎々

数秒の後、反対の声を上げていた一人がすっと前に出てくる

「どうした、蒋欽？」

「・・・上の方々は皆認めてるんで？」

蒋欽と呼ばれた男は静かに続ける

「見ての通り、俺を含め下の奴らは皆、認めちゃ居ねぇです。
そんなポッと出の仮面で素顔を隠すような男認めろって方が無理でさぁ。」

スッと腰の剣を抜いて切っ先を兎々に向ける

「だから、実力を見せてくれませんかね？
少なくとも俺等武官は人と成りがどうだろうと実力があればそいつを認める。
元山賊の俺がこうして筆頭武官なんてやってるのも実力で認められたからだ。
それに、あんたはあの孫堅様の義息子（むすこ）なんだろう？

なら、少なくとも戦えるよな？」

「おいっ・・・」

「かか・・・いいじゃん？分かりやすいぜ？そう言うの。」

冥琳が何か言おうとするが兎々が無理やり押しとどめる

「お前が勝ったら、素顔も、素性も、オレの何もかもぜぇんぶ教えてやるよ。
ただ、オレが勝ったら、お前、オレの部下に成りな？
良いよな？策姉ぇ、周喩？」

くかかかか、と楽しそうに笑う兎々

「まぁ・・・良いだろう、では中庭に」

「あぁ。いいっていいって、移動もめんどくせぇし、ここでやろうぜ？
見た感じ蒋欽の武器は双剣だろ？
ならそこら辺あけてくれたら戦うには十分だろ？」

なぁ？と蒋欽を見て挑発的ににやりと笑う

「・・・お前の武器は棒ではないのか？」

「はん、義母さんを知ってるなら言うまでもないだろ？
武器を選ぶのは三流、選ばないのが二流、使いこなすのが一流、
使わないのが超一流。
・・・最も、オレの場合は二流止まりだがな」

そう言って、手に持った剣の感覚を確かめるかのように振り回す。

「っ！？いつの間に剣なんか・・・」

「ぁン？あぁ、剣、借りたよ？祭姉？」

「おぉ！？」

祭の驚く顔を見てクックックと楽しそうに笑う兎々

パシっと手首で回していた剣を持ち構える

その構えは・・・

「・・・舐めているのか？」

剣は逆手持ちで、剣の腹を腰につけ、もう片方の手は熊手で床に犬の様な狼の様な、とにかくそんな構え

「これがオレの構えだ・・・逝くぜ？」

ダンッ

音が成ったと同時に一瞬、兎々は誰もの視界から消える

つまり・・・

「上かっ！？」

振り下ろされる剣を視認するより前に、上に双剣を振りぬく

ギギンッ

トッ

着地した兎々、双剣を振りぬいた蒋欽
背中合わせの二人は同時に振り返り剣を振るう

一閃

兎々は斜め下からの振り上げ、同時に蒋欽は振りぬいた勢いのまま回転して右手を振るう

ガキィンと、剣がぶつかり合う

二閃

剣がぶつかると同時に後ろに飛びのき、蒋欽は回転のまま左手の剣を振るう

ブォン、と蒋欽の剣が空振る音が響く

一瞬の間

兎々は両手両足を地面につけ、蒋欽は上半身を限界までひねり両者が睨み合う

三閃

獣の様に両手両足で床を蹴り弾丸のように飛び出した兎々と、両手の剣を重ね渾身の力で振りぬき迎撃する蒋欽、そして・・・

「・・・」

「・・・」

広間に広がる静寂、勝ったのは・・・

「今日からお前はオレの部下だ」

「・・・約束は守るさ」

両手を振りぬいた格好の蒋欽と、その蒋欽の首に剣を突きつけた兎々

兎々に、初めて部下ができた瞬間だった

士官の話～孫呉第四位継承者～（後書き）

クオリティが・・・＞＜；

リハビリにネギまでも連載してみようかと思ってたり・・・（え

１２月１４日戦闘シーン修正

弟の誕生日というｗ

陳武隊の話～“信用”と“信頼”～（前書き）

長らくお待たせしました・・・＞＜；

言い訳はしません、罵られても仕方無いです。

すみませんでしたｏｒｚ

陳武隊の話～“信用”と“信頼”～

調練場
そこに集まったのは、蒋欽隊、約８００名
いや、今は陳武隊と言うべきか

とにかくそこには８００の兵士が集まり、蒋欽と兎々はその兵士の前に立っていた

「・・・はじめにハッキリさせようか、オレを信用できない奴、オレの言うことが聞けない奴は蒋欽の方に並べ、逆にオレを信用できる、オレの言うことが聞けるって奴はオレの方に並べ、時間は十秒、はじめっ！」

「お、おいっ！？」

蒋欽は何か言おうとしているが黙殺
十秒経って、オレの前には１０人、ほかは蒋欽の前に並んでいる

「・・・予想より多いか・・・オレの前にいる１０人はオレの直属にする！それ以外の奴にはオレは指示しない！つまり、名前は陳武隊に変わっても実質は蒋欽隊のままってことだ！以上！蒋欽、あとは任せた。オレの前の１０人は明日の明朝、日が昇る前にここに集合、解散！蒋欽はちょっと来い。」

それだけ言って騒めく調練場を後にする

・・・・・・・・・

・・・・・

・・・

「・・・陳武さん、どういうつもりで？」

城の中庭とでも言うべきか、少し開けた椅子と机の置いてあるところで蒋欽と向き合う

「お前の前に行った奴ら、あいつらは何してもオレの指示は聞かんだろうさ、ぱっと見で、まだ軍人とまでは言えないような奴らばっかりだ。なら今まで通りにお前が指示したほうが混乱はしないだろうし何より無駄死にする奴も減るだろうよ」

あの隊は蒋欽が山賊の頃からの部下、それに３０人ほど老練の兵士を加えただけだ

その老練の兵士の大半も仮面つけた怪しい奴には従いたくないらしいが・・・

「それにな、１０人もオレの方に来るのはちと予想外だ。多いくらいだぜ？」

「１０人でですか？」

「あぁ、オレは基本、騎兵なんだよ、ただし普通の騎兵じゃぁない。」

「はぁ・・・？」

訝しげな顔をする蒋欽

「・・・お前は俺を信用できるか？信頼できるか？」

「・・・いきなり、意味が分かりませんぜ？信用と信頼は同じじゃ？」

「信用は“用いるのに”信を置く、信頼は“頼るのに”信を置く。簡単にいえば利用するのに信を置けるか、背中をあずけるのに信を置けるかの違いだ」

感心して聞いていたが、そのあとに、言葉遊びだけどな、と繋げると微妙な顔をされた

「まぁ、とにかくだ、お前はオレを“信用”か“信頼”出来るか？」

「・・・」

ところどころ茶化してはいるが真剣なのは伝わったのか少し考える蒋欽

・・・考えるってだけで決まってるようなものだけどな

「・・・まだ、“信頼”はできねぇ」

そりゃそうだ

会って一日もない、更に仮面で顔を隠した不審者全開の男を“信頼”するなんて余程の酔狂かお人好し位だ

「だが、一戦交えてあんたの実力は知っている、だから“信用”は出来る」

「・・・ま、そんなもんさね。」

やれやれ、と両手を上げて首を振る

「じゃ、まぁ理由は言えないが結果だけ。オレは猛獣を従えることができるんだよ」

「・・・」

「信じれないだろうがな。だが真実だ。だからそいつらを騎馬替わりに使う。５人、従ってくれりゃあ良いと思ってたんだが・・・１０人となるともっと連れてこなきゃならない。だから１０人で多いってわけだ。」

かか、と笑い立ち上がる

「さて、今日は疲れた。オレは部屋に行く。また明日な。」

ひらひら後ろ手に手を振り歩き出す

「あぁ、そうそう、１０人以外の奴らについては何するにも全部お前が決めていいから。上にはオレから適当に伝えとく。」

ぴぴ～、と口笛を吹きながら、戯れてくる小鳥をあしらいつつ、部屋ってどこだっけと周瑜に見つかるまで城を徘徊してたのはまた別の話だ

陳武隊の話～“信用”と“信頼”～（後書き）

終わり方が微妙・・・

サブタイはそのまま。

兎々は信用してくれる相手にはある程度自分のことを話します。

信頼だと大半。

兎々の事情を全部知ってるのは堅ママと祭、あと一人です。

因みに

会って一日もない、更に仮面で顔を隠した不審者全開の男を“信頼”するなんて余程の酔狂かお人好し位だ

これ、察しのいい人は分かったと思いますが、曹操と劉備のことです。

微妙なフラグですｗｗ

今回はこれくらいで。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n2100p/

真・恋姫†無双　陳武編～化け物は貴様等“人間”だろう～

2011年12月15日01時49分発行